

外来するものと内発するものの統合― 序にかえて

放送教育開発センター制作部長 栗 田 博 行

放送大学授業番組は、そのほぼ全てが一人ないしは数人の講師教官が大学教育の内容を論述する講座番組、欧米では“トーキングヘッド”などと呼ばれる演出形式をとっている。これは、放送大学事業が放送を通じての直接教授を主体とする遠隔教育であることに根ざしており、別の面では制作設備やスタッフ、制作期間、経費といった現実的条件にも根ざしている。この形式によらなければ、1日18時間放送する全番組を現在の条件で自主制作するという「大量制作体制」は維持できない。

従って、放送大学授業番組の担当ディレクターは、数あるテレビ番組の演出形式の中で、一番地味な“講座番組”と呼ばれる演出形式を採用するしかない。他に選択の余地は無い。加えてその講座番組の企画は、ディレクターが打ち出したものではなく、放送大学教務委員会が策定したものであり、ディレクターはそのひとつを担当することとなった、という関係にすぎない。

つまり、番組制作をひとつの表現活動として捉える時、放送大学授業番組の制作はその動機も表現形式も表現する内容も、ディレクターにとって外から来たもの、課せられたものということになる。

それでは放送大学授業番組の制作という行為はディレクターにとって、表現活動ではないのだろうか。講師教官が内包している情報（大学教育としての内容）を、自と他に分ければ“他から到来したもの”として受け取り、それを映像に具体化する（映像化する）という“情報の次元転換の介添えの活動”をしているだけのことなのか…。

おそらく、こんな自問自答を胸中にしまっているディレクターは誰も居ないだろう。仮に問いかけてみると「それどころじゃないヨ」と二べもなく忙しそうに立ち去る後ろ姿が見えるような気がするし、深追いすれば「表現なんて面映ゆい。番組屋として映像化に努めているだけのことサ」という返事がいったんは返って来そうな気がする。そしてそれはかなりの部分、放送大学授業番組の制作という、放送制作全般の中の特異な1ジャンルを説明しているような感じがしないわけではない。

にもかかわらずこんな問いをここに持ち出し、愚問自答を始めたのは「映像化」というよく使われる言葉が意味する活動を「情報の創造・生産」という次元の行為の中に位置づけるひとつの整理の切り口（あいまいな言葉だが）が見つかりそうな気がしたからである。一例を引こう。

平成4年度に制作が行われ、本報告書にも一章が充てられている「記号学入門」の録画をある日、所内モニターでウォッチして居た筆者は、いつもの通りタイトル部分が流れ終った所で画面に目を遣り、フッと番組に引き込まれた。

目のクリクリした賢そうな2～3才児らしい男の子が、しきりに「これナアに？」と聞いている。若々しい、しかし自然な落ち着きを見せるお母さんが「ピポ、ピポ…」と擬音で答える。

「パヨカー？パヨカー！」と男の児が指さしながら発音する。指さしている先にパトカーらしい何かが、画面には映ってはいないが、あるのだろう。次に男の子はしほみかけの赤い風船をもってきてお母さんに手渡す。そしてまた「これナアに？」と問う。お母さんは「リ・ン・ゴ」と応えた。男の児は「リンゴ、リンゴ…」と呟いた後、一拍あって、毅然として「チガウよ。フウセンッ！」と真理を喝破した。

お母さんの我が児のゴッコ遊び期のノリへの優しいおつき合いに対して、その時期を脱しかけている男の児の自我が「違う。それは単なる風船である」と断定し返したわけである。クス〜とおかしがるお母さんの声とともに筆者も大笑いせざるを得なかった。つまりは、番組に引き込まれたわけである。

以上、映像としては30秒程度の提示だったような気がする。お母さんのクスクス笑いの所で、画面はボンと切り変って講師・塚本明子先生のお話となる。

講師・塚本先生のお話（映像は、講師バストショット）「子どもは『これナニ？』を連発する時があります。それは子どもにとって世界に眼が向けられている時。そして知識が急速に広がっている時に当たっています。今日は『これは何ですか』をテーマにして抽象と記号の問題を考えてまいります」

そして画面は次に『これは何ですか？』という文字情報だけの構文の提示となる。講師手元の白板に置かれた文字カードでそれは提示されるのだが、そこにさらに講師の手によって『これ』という文字カードが追加されながら、次のような、この構文の記号論的意味が押さえられる。すなわち、『これは何ですか』とは、ある人間にとって、世界がまだ無分別の状態にある中で何かが注意を引き、それを対象として明確に捉えようとする時に発動する最初の認識の機制であり、『これ？』とはその中でさらに始源にある認識の契機である、といったことである。この間この論旨の押さえに割かれた時間は2分弱程度。

次いで画面またボンと切り変る。ほの暗い画面に、光の玉が沢山浮んでおり、画面右から左へとゆるやかに動いている。その光の玉が赤・白・青と変化するが、その光自体ボヤけており、その背景も、光を発するそのもの自体も何だかしばらく解らない。そんな状態が無言で数秒続いて見る者を引きつけた後、講師の言葉がやっと出る。「これは何でしょう…。赤いようでもあり、白いようでもあり。何ダ、ナンダ？」その辺りで画面はゆっくりフォーカスインされ、そのモノが筆者もそれが何というグッズか知らないが、時に見かけたことのある、光ファイバー繊維で造られた工芸品らしいことが、判明してくる。そのあたりで塚本講師は「私ならこれを『ララ』と名付けます。言ってみれば“白い噴水”“渴いた水”というような意味を持たせて…。」次に画面はライトアップされて、もう一度変化する。ここに来てそれが光ファイバー製の室内装飾工芸品であることがしじらと明らかになるが、画面はそのままその状態で回りつづけるそのグッズを映し続けている。その映像の上に講師の意味づけの言葉が続く。この映像に対して「ララ」と呼んだ時が、未知なるものに出会った時生ずる「これは何？」という認識の機制の中に生ずる名付けの瞬間であったこと。その上でさらにそのものの特徴を取り出して“白い噴水”また“渴いた水”と呼んだことで、そのグラスファイバーの光工芸品・「ララ」が、講師自身の記号の宇宙としての意味の体系に組み込まれたのであること。…そして、人間はそのような作業を記号とモノその間で、無数にくり返しているのであること…。

以上、番組が始って5～6分間のことであるが、男の児のイントロ（導入部分）から始まって「ララ」に至る流れの中で、気がついてみると、筆者はスッとこの授業番組の中に快感をもって引き込まれていた。

番組を見終ってある事を考えた。「男の児」と「ララ」。一視聴者としての自分を引きつけた二つの映像はどのようにして誕生した（創出された）のだろうか…ということについてである。そこが気になって後に担当ディレクターに聞いてみた。もう日が経ってよく憶えていないが、としながらディレクターは塚本先生と行った打合せの内容を概略思い出してくれた。「この回は記号と抽象と題されていて、それをより具体的なものにするための打ち合せで、塚本先生から『これは何ですか』という意識の働きの意味を、しっかりと押えたい、ということが強調された。その中でとりわけ“名付け”ということが持つ認識上の働きの大切さをまだ名前があまり知られていない、しかし人の気持を引きつける何かを材料にして語りたい、との考えを言われた。どんな映像で実現それができるか、ということを考えているうちに、光ファイバーの工芸品を思い付き、それをフォーカスアウトから、フォーカスイン、そしてライトアップという風に撮影してはどうかと考えた」との事であった。そしてあの男の児の方の映像は「2～3才児が連発する『これナーニ？』がこの回の塚本先生の話にカラミそうな気がしたので、このシリーズのロケスタッフに、『機会があったら撮っというて』と頼んでおいたら、ウマくある家庭で撮り当てて来てくれた。そこでイントロにテーマの提示として配置することを先生に提案した」というようなことであった。

放送大学授業番組の制作過程でよく繰り返されている講師・ディレクター・撮影スタッフの共同作業風景と言えよう。しかし、これを講師の提供した情報をディレクターを始め制作サイドが「映像化」した、と把えるのでは少しく大雑把すぎる気がする。

打ち合わせの段階で講師は、自分が述べることになりそうな論旨とそれに必要となりそうな具体的な材料を抽象的なねらいとして投げかけたであろう。「まだ名前があまり知られていない、でも人の気持を引きつけるような何かが映っている。そのような画面で“名付け”という行為が持っている認識上の作用について、述べることにしたい」という風に。これを受け止めたディレクターの脳裏に、ある時ひとつの発想が湧く。「グラスファイバーの、アレでどうか…」あるいは「何かないか…」と考えていて街角でたまたま出会ってピンと来たのだったのかも知れない。いずれにしても本質は変わらない。その映像を生む着想はディレクターの内部に湧いたのである。記号学入門という番組を担当し、記号学的認識論への一程の知識と理解に達している。そして「これは何ですか？」という構文の記号論的意味を伝えようとする回に当たって、“名付け”の重要な働きを具体的に説明したい。その時、その具体物とは何か…。ディレクターの意識の内部にそれだけの準備があったからこの発想は生れた。それが無ければ、たまたま街角の店頭で出会ったのであったとしても、その光ファイバーの工芸品は映像になることは無かった筈である。立ち止って目を向け、通りすぎてお終い、それだけにとどまったことだろう。

その意味で、後に女性講師によって「ララ」と名付けられ、白い噴水、渴いた水の意味をも与えられることになったこの映像は、一ディレクターの内部に「誕生した」のである。ディレクターによって創り出された、と言ってもよい。

「映像化」というよく使われる言葉がある。まず、被写体があって、次に撮影という行為が行われ、結果として映像が得られるという意味合いで使われることが多い。もうひとつ。言語情報によりイメージの具体化が先行して詳しく行われており、その通り忠実に作業することによって映像が実現する、といった意味合いでも使われるようだ。筆者はそのような意味で使われる「映像化」と「映像の創出」を明確に差異を持たせて使わなければならない、という思考の誘惑に時々かられる。

しかし、これをまた仮にディレクターに問いかけてみるとすると「そんなことどちらだってイイじゃない」というニベもない答えが返って来そうな気がする。その理由もこの事例で説明できそうな気がするので、もう少しこの例題から述べて行くこととしたい。

「男の児」の映像の方である。記号学入門・第9回・抽象(1)―抽象のはじまりは、タイトル部分で以上の字幕提示を終えると、わずか30秒余りだが「これナアニ?」「リンゴ」「ちがうヨ、フウセンっ!」というあの男の児とお母さんの会話を映像によって提示し、視る者を講義内容に惹き入れることに成功した。それは、講師論旨の展開の面では、主題を具体的に設定し、さらに細分化してゆく過程を支える材料となった。「これは何ですか?」という認識の機制。そこにおける「これ」という意識の働きの意味とそれに呼応する“名付け”という行為。その認知作用における根源性の指摘…という風に展開された記号学の論旨は、この30秒ばかりの、子どもを持つ家庭なら日常的に見かけられる映像によって可能となった。

この「男の児」の映像は、どのようにして創出されたのだろうか。またそれはどんな考えで番組冒頭に配置されたのか。実はそれはそんな事々しい機微に由るものでは無さそうなのである。

担当ディレクターの記憶の薄れの合間を推察で埋めてゆくと、次のようなことであつたろう。まず初めに、講師塚本先生の“名付け”の認知作用における大切な意味を記号学の見地から話したい、とする意向があつた。これを打合せで知ったディレクターの中に「おそらく知恵づき期の子どもが大人を質問攻めする、あの風景がお話に役立つだろう…」といった思いがごく自然に発生したのであろう。それは平たく言えば「ピンと来た、カンが働いた」といったタイプの、ディレクターの経験に根ざした思考の働きだった推察される。政治学や経済学の分野や物理、数学といった領域の番組づくりを専らとしていたディレクターならいざしらず、教育学や心理学の番組領域で経験を積んで来たベテランディレクターにとっては、特段沈思熟考の末に得られた発想といったものでなかった筈だ。しかしまたそのベテランらしい経験則は、2～3才児の日常に見かけられるそのような風景が、実は一瞬一瞬の生活の自然に即して推移し、ねらっても設定してもなかなか取り当てられものではない、案外実現の難しい映像であることも知っていたことであろう。そこで撮影スタッフに対して「機会があつたら撮っというて」というくらいのゆるやかな依頼となった。その内容も、男の児なのか女の子なのか、相手するのは母親なのか祖父祖母なのか、会話の内容はどのようなものか、場所は、時間は、などイメージを具体的に明示し、出来上がる映像を特定のものに限定する要素を欠いた（＝敢えて外した）包括的な要請であつたことであろう。「ほらよく見かける子どものあの質問攻め、アレを…」というくらいの。

要請を受けた撮影スタッフの内部にはどのようなことが起るか。彼等の内部にも又、あの

「ピンと来る、カンが働く」という認識の機微が発生する。番組は記号学入門、この回の主題は「これは何ですか」という認識の機制、そして特に強調される“名付け”の意味と働き。例えば2～3才児の質問攻めの風景などは今回の番組に活かせるかも知れない…。そのくらいのメッセージ（撮影意図・映像のねらい）の伝達だけで、カメラマン・ミキサーそれぞれの内部に、その「ピンと来る」機微が生じる。彼等の生活経験と職業経験を、講師・ディレクターを経て組み立てられた簡単なメッセージが刺激したのである。ここにおいてこの撮影スタッフの中に、一瞬一瞬移ろい多様を極める外部世界に対し、ある特定のものをねらい、それを映像として撮り当てようとする意識がセットされ、持続されることになる。

あの「男の児」の映像はついでに撮られた映像であったと言う。「機会があったら撮って」という依頼を「ピンと来て」いた撮影スタッフは、別の回の記号学入門のロケである乳幼児を抱えた家庭を訪れた。

撮影目的は、喃語から脱しかけた時期の一才の女の児の発する言葉の風景を撮り当てることにあった。撮影終了後、「ピンと来て」いたスタッフの一人が女の子のお兄ちゃんの言動に目を止めた。「これだ！」。撮影スタッフはもうひと働きすることとなった。そのようにしてこの映像は、ついでに撮り当てられ、ディレクターと講師に向けてフィードバックされた、というわけである。

これは、被写体という、撮影スタッフの外部世界の側で条件が整ったことにより、偶然撮影が可能となった、映像化が実現したというエピソードではない。同じ外部条件の中にあっても、これが撮り逃されることは常に起っている。看過する、むしろそのことの無限の繰り返しによって普通の生活人の意識は安定して維持されていよう。しかし、ある表現の意図を「ピンと来て」いて、それに基づくねらいの意識をその内部に持続させている職業人たちは、千変万化する環境にあって、一瞬そこにその意図を実現する条件が整ったことを看逃がさない。質問攻めの男の児とこれに答えるお母さんという、ほほえましいがよく見受ける平凡な風景が、番組を支える重要な映像のひとつとして撮り当てられたのは、以上のような認識と表現に関する活動があったることである。映像を事とする世界でよく起っているごく普通のことだが…。

その意味である「男の児」の映像は、撮影スタッフによって「創出」されたのである。ちょうどよい被写体に恵まれて「映像化」なったというだけのものではない。ディレクターから実現すべき映像についての、言葉による具体的明示的指示があり、それを忠実に「映像化」したというものでもない。

だからと言って撮影スタッフは「自分たちこそがこの映像の創造者だ」とは、おそらくは主張しまい。ではディレクターか？彼もまたそうは言うまい。講師は？この場合、講師もまた同様に感じるのではないだろうか。なぜか。テレビ番組の制作という場では、この作業に関る者のひとりひとりが番組のねらいとか演出意図とか呼ばれるメッセージを心得、その上で持場に応じ自ら「ピンと来て」活動する主体者であるしかない。そのような相対的な場の行為であることを、肌身にしみて知っているからである。ここには物品生産の行為における設計図や仕様書に当るものは存在しない。同じ映像の世界であっても、映画における映画監督のような絶対者も居ない。台本はあるが、それは映画におけるシナリオのように一言一句、一挙一動を規定するものではない。強いて絶対的なものを捜せば「時間」と「コスト」ということになるだろうか。

放送大学授業番組であることで、その表現活動の成果物の「内容時間」は、絶対的に44分であらねばならない。その活動の達成は〇月×日と所定された本番収録日時にはほぼ絶対的に拘束される。そして「コスト」もまた15回シリーズ全ての制作活動を支え規制する点である絶対性を含んでいる。

それら以外には絶対的なものが不在の多人数の共同作業が、混乱と分散に陥入らずがある意味合いのもとに集合構成された成果物（番組）として出来上ってゆくのである。その中核となる働きをしているのは、メッセージ（番組のねらい・演出意図）である。メッセージを共有しようとする場の文化である。さらには、外来するものであるメッセージを受けて、「ピンと来る」＝意味を会得し自ら新たに着想し活動する職業的専門家達の心の内の働きである。

「映像化」か「映像の創出」か、その差異に厳密に拘ることも無いという感覚はそのことに由来する。くり返しになるが、ドラマを除いてテレビジョンの制作活動の多くは、外来するメッセージを受けて、「ピン」と何事かを会得して自ら活動する者達のコミュニケーション過程、行動過程なのである。

この過程で最初にメッセージを発信するのは放送大学授業番組の場合、出演講師である。そしてこの過程が生み出した数多くの成果物（＝番組に活用される字幕、映像等の諸中間素材）を、一挙に意味の流れに即して構成統合する作業（＝本番）において中心的な役割を演ずるのも、出演講師である。要するに講師のお話のもとに、それら成果物は組み立てられて番組となる。その点で講座番組の出演講師は、映画における映画監督、さらには脚本家及び主演者のような位置と役割を荷っている。それにもかかわらずこの世界では絶対者としての講師のパフォーマンスをあまり見かけない。それは講師も又、テレビジョンの制作の場の文化、その共同作業の性質を心得られていることによるのではないだろうか。例に引いてきた「記号学入門」の場合、次のような推察が成り立つ。

講師→ディレクター→撮影スタッフというコミュニケーション過程によって具体物として実現した映像は、次に撮影スタッフ→ディレクター→講師という流れでフィードバックされる。撮影スタッフから、他のものも多数混ったラッシュ（未編集映像）を受け取ったディレクターは、「男の児」と「ララ」に着目する。そして講師の論旨の展開を想定しつつ、「男の児」の上述した会話と場面を取り出し（編集し）、これを番組の冒頭に配置することを着想する。次にこの映像から講師がトークによって今回の主題を引き出してゆくことを想定し、そこに説明材料として「これは何ですか？」という文字カードを用意しておくことを思い立つ。そしてそれを使いながらの講師の論旨の展開の中で、映像「ララ」ーまだ名前があまり知られていない、しかし人の気持を引きつけるような何かーが活用されるだろうと予測し、配置をそこに決める。つまり、編集・構成を終えたわけである。

編集された映像とそれらを使って展開する論旨の構成（案）のフィードバックを受けた時、講師の内部に何が起るか。ここでもまた、あの「ピンと来る」機微が発生した筈である。「男の児」の映像提示を受けて「子どもは『これナニ？』を連発する時があります。それは子どもにとって世界に眼が向けられている時。そして知識が急速に広がっている時に当たっています。今日は『これは何ですか』をテーマとして抽象と記号の問題を考えてまいります」という主題設定のトークは、そのようにして講師の内部で創り出されたのであろう。「ララ」も同様であ

ろう。光ファイバーの室内装飾工芸品の、フォーカスアウト、イン、ライトアップという映像に、「何ダ、ナンダ?」「私ならこれを『ララ』と名付けます。言ってみれば“白い噴水”“渴いた水”というような意味を持たせて…」と女性講師によって加えられたコメントは、映像に接した時、まさに講師自身の内部に発した実感から生み出されたものであろう。60代男性のディレクターによって着想され、あらかじめ書き込まれていたコメントとは、とても思えない。

放送大学授業番組の制作という行為は、例えばそのスタジオ収録作業を垣間見る時、淡々として機械的な、創造的な活気に遠いもののよう受け取られがちなどころがある。静かに安定した大量制作体制が今日も回転している—そんな印象を与える所がないわけではない。しかしその静かな作業風景の内側には、これに関る者達の、以上述べたようなタイプの表現活動、創造的契機が潜められているのである。企画が外から来るものであり、講座番組という演出形式が他に選択の余地の無いものであるといった基本条件をディレクターがさして気に止めていないのも、それ故であろう。

世は一挙に情報の時代に突入してしまい、気がついてみると人間の生産する成果物が物品より情報のレベルに焦点が合わされる社会になってしまっていた。創造し生産する成果物が「情報」である社会。そのような社会では、物品とも芸術作品とも異なる創造と生産の原理が作動せざるを得ない。外から到来するメッセージに呼応して、自らの内部に様々なものを発し、それにもとづいて具体的に活動する。そのような専門的職業人たちの組織的活動により番組が次々実現していく風景に日常接しながら、意識労働のヒューマンでデモクラティックな新しい協同の原理が動いているのを筆者は感じることもある。

本報告書にはとりわけ講師とディレクターという関係の中でそのような協同作業をなし終えた実感からのディレクターサイドの報告が中心に収載されている。両者間のメッセージの往来が生み出すものに眼を向けていただければ幸である。

末筆ながら講師のお立場から玉稿を賜った『ヨーロッパ論Ⅱ』主任講師・澤田昭夫先生にお礼を申し上げます。